

こしゃく 小癩な子ども、昔と今

りょうかん 良寛さんの時代の子どもと現代っ子

立科町教育相談員 岩上起美男

「今どきの若い者は……。」という若者の生き方や考え方、言葉遣いなどを嘆く大人の言葉は、古今東西を問わず、様々な形で残されているそうです。紀元前の時代から、若者の危うさや頼りなさは、老成した大人にとって永久不変の心配事であり、かつて若者であった大人の、誇張と錯誤によって美化された過去を基準とする「今どきの若者批判」は、世界の至る地で飽くことなく繰り返されてきたのでしょうか。

では、「今どきの子ども」は、どうでしょう。変わったのでしょうか。それとも、変わっていないのでしょうか。

江戸時代後期の禅僧であり、歌人であり、漢詩人であり、書家である良寛さん（1758～1831）は、今もお多くのの人々から敬愛され、慕われています。不安や迷いを断ち切り、心穏やかに生きるヒントを、良寛さんに求める現代人が少なくないのだそうです。

「この里に手まりつきつつ子どもらと遊ぶ春日は暮れずともよし」と詠んだ良寛さんは、子ども好きとしてつとに有名です。手毬唄の人・良寛さんは、どこへ行っても子どもたちを集めて、楽しく無心に遊んでいたそうです。その村里の光景は、妙に懐かしい感慨を伴って、影絵のように脳裏に浮かんでいきます。

しかし、子どもたちと仲良くなり、子どもたちが良寛さんとの遊びを待ちわびるようになるまで、良寛さんは、物見高い腕白小僧に随分と手こずっていたようです。子どもたちが、里の家々を托鉢に回る乞食僧・良寛さんに出会うたびに好奇の目を集中して、執拗にからかったり、嫌がらせをしたりしたからです。そのため、良寛さんは、宿場の長に「あなたの里の子どもたちははなはだ癖が悪い。」と嘆いたことがあるそうです。また、九十ヶ条にも及ぶ言葉遣いに関する良寛さんの戒めを集めた「戒語」にも、「子どものこしゃくなる」という条文が残されています。その意味は、「子どもが、癩に障るような生意氣を言うのは良くないことなので、戒めなければならぬ。」と解しています。禅寺での修行と諸国行脚の後、故郷・越後に戻り、寺の隠居屋を借りて住み始めたばかりの40歳代の良寛さんにとって、小生意氣ないたずらっ子の対応は大きな課題の一つであったようです。

やがて、修行僧・良寛さんは、子どもたちの嫌がらせもいたずらもそのまま受け入れることによって、すっかり子どもたちと打ちとけて遊ぶようになりました。が、癖の悪い子や小癩な子は、江戸時代にも確かにいたことがうかがえます。いつの時代も、子どもは無邪気で、純朴。

あどけなくて、正直。素直で、元気。そして、心の中に無限の宇宙を有する存在であると同時に、小生意気で、残酷で、わがままで、移り気で、平然と人をさげすむ、という小癩な面を持っていたのでしょうか。

今日の日本は、急速に移行した情報社会です。携帯電話とパソコンの驚異的な普及によって、200年ほど前の良寛さんの時代はもろろんのこと、昭和50年代と比べても、子どもを取り巻く生活環境が激変しました。そのため、古いの追憶にありがちな過去を装飾する傾向を差し引いても、乳幼児のころからの、テレビやゲーム、パソコン、ビデオ、携帯電話などの電子映像メディアに対する接し方や姿勢によって、現代っ子の「心の育ち」の幅広さが拡大していると思われるかもしれません。したがって、「今どきの子ども」は変わったと認識することは、何千年も昔から繰り返されてきた「今どきの若者批判」とは、明らかに異なる「子ども理解」で、良寛さんの「子どものこしゃくなる」という戒めの中身が複雑化し、深刻化していると受け止めることが、一人一人の子どもに即したきめ細かな子育て支援の第一歩です。

現代っ子の一般的な特徴については、